

個別接種（大阪市）

澤田宏子

新型コロナウイルス感染症に対して新型コロナウイルスワクチンの接種が令和3年2月17日から日本で始まり、令和3年12月17日時点で令和3年12月から始まった3回目接種も含めて、総接種回数は198497730回を超えた。12歳未満の小児はまだ接種対象ではないが、副作用懸念から若い方は接種を躊躇するといった予想に反して、ほとんどの国民が接種した結果となった。結果からみれば順調のようだが、個別接種の経過がけっして順調であったとは言えない。接種開始から混乱続きではあったものの、多くの医療機関、特に診療所が個別接種に参加した令和3年6月から1日あたりの接種回数が100万回を超え、飛躍的にワクチン接種がスピードアップしたと言えるだろう。大阪市の個別接種について振り返ってみる。

接種委託医療機関になるには全国の各市町村と実施機関となるために契約が必要ではあるが、全国の各市町村と個別に契約することは現実的ではないため、集合契約への参加を必要とした。委任状を取りまとめ団体（大阪市区医師会）に提出して登録となる。集合契約は令和3年2月12日に締結されたが、その後も委任状を提出して集合契約に参加可能であった。追加参

加は継続されており、今まで予防接種を行っていない医療機関も接種委託医療機関となるケースがあった。

当初ワクチン接種前の国から届いたスキームでは基本型接種施設（-70℃のディープフリーザーを設置して直接ワクチンの発注を行い、一度に大量のワクチンが納入されることから多くの接種を行うことができる施設）は病院を想定し、サテライト型接種施設は診療所の想定で、それぞれが基本型接種施設を探して、3つ程度のサテライトがぶら下がる想定であった。基本型接種施設となった病院からサテライト型接種施設となる各診療所へワクチンを個別配送するなどどう考えても出来るとは思えず、各自自治体に届いたワクチンをサテライト型接種施設に分配する方向となった。大阪市の場合は、大阪市内にそれぞれ独立した医師会が多数存在するため、行政との調整は簡単には進まず、また-70℃のディープフリーザーからいったん取り出したワクチンの取り扱い規定から考えると各区役所が区内の医療機関へワクチンを配送することも難しいと思われる、いったいどこから配送されるのかは直前まで決定されなかった。大阪市の行政との交渉に大阪府医師会のご尽力があり、大阪府が設置する「大阪市内ワクチン配送センター」からサテライト型接種施設にワクチンが配送されることとなった。

令和3年4月30日に新型コロナウイルス発注調査票が大阪府保健所感染対策課から医師会を通じてFAXで届いた（FAXで

の回答締め切りは5月1日)。5月20日から6月11日到着分までがこの調査票に基づいて発注となった。直前になんとかワクチン配送ルートが決まり、大阪市が設置する「大阪市ワクチン配送センター」からワクチン配送されることになり、医療機関への配送ルートと配送曜日と配送温度(冷凍または冷蔵)が固定された。

診療所であってもアナフィラキシーに対応できるように、大阪市より1回限りだが救急用物品(アンプ蘇生バック成人用、アドレナリン注0.1%シリンジ、ノルアドレナリン、ニプロフロマックス注射針、医療用酸素ボンベ3.L型、カニニューラ、酸素マスク、酸素ボンベ台車)が無料で配布された。ワクチンのアナフィラキシーは全国的にもあまり発生せず、当院ではこれらの物品を一度も使用することはなかった。

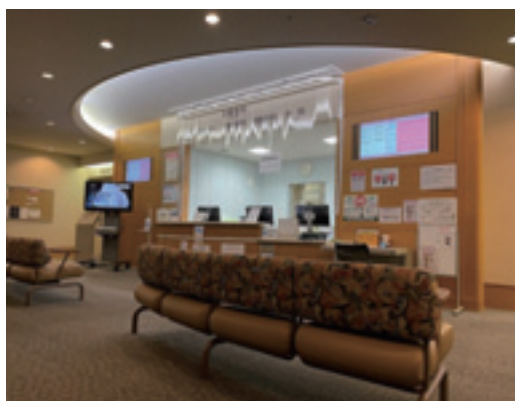
もともと混乱となったのは個別接種の予約であった。高齢者への接種券が届き、誰もが早くワクチン接種したいという希望であったことも予約の集中に拍車をかけた。V I S Y S (ワクチン接種円滑化システム)の医療機関の情報がコロナワクチンナビに表示され、予約受付状況(受付中 受付不可)、接種対象者(一般、かかりつけ)など広く知らせることになった。個別接種予約(予約開始日、対象者、予約方法等)に関して、各医療機関に直接問い合わせるように大阪市民に案内されたため、令和3年5月17日から各医療機関への電話での問い合わせ、

来院による窓口への問い合わせによる混乱が生じた。接種間隔が決まっていたことも予約の取り方が難しい要因であった。ファイザー社ワクチン1回目と2回目の間は18日以上の間隔において、標準的には20日の間隔(3週間)で2回目を接種することとなっていた。家族総出で大規模接種会場、集団接種会場、個別接種の予約を同時に取って、すこしでも日付の早い予約を求めるあまり、かかりつけ患者でないケースではキャンセルも多かった。

個別に届いたアナログ的な接種券(1・2回目)もまた大変であった。横長の接種券はシールタイプで、接種券と診察した
が接種できない場合(予診のみ)とその右側には新型コロナウイルスワクチン予防接種済証があり、接種したワクチンロット番号シールを貼ることとなっていた。接種当日には、接種券と本人確認ができる書類を持参することが必須であったが、高齢者の中には接種券を忘れたり、接種券をあらかじめ予診票に貼ってしまったり、接種券を細かくハサミで切ってくるケースなど見受けられた。独居高齢者や認知症の高齢者に対して、医療機関の中には接種券を事前にあずかるところもあったようである。

個別接種が始まってから、ワクチンの発注はワクチン要求書をFAX、メール、スマートフォンから発注可能となり、後日ワクチンの確定本数が通知された。予定通りに個別接種が進む

と思われたが、数週間後には要求通りにワクチンが確約されなくなつた。7月1日大阪市松井一郎市長より記者会見でファイザー製ワクチンの供給不足のため、個別接種1回目の接種予約を中止すると発表があり、7月12日から集団接種・個別接種ともに1回目の接種が休止となつた。7月19日から2回目接種を優先して、1回目・2回目ともに接種可能な在庫のある診療所では1回目も接種可能であつた。そのころの個別接種の供給確定ワクチン本数は、要求の30%以下、場合によってはもっと少ない医療機関もあつた。8月の第2週のお盆休みの配送は中止となり8月16日以降は固定配送へ変更となつた。8月下旬より大規模接種会場がさらに拡充され、9月ごろから職域接種の拡大、また職域接種での余剰ワクチンを地域住民に開放するなど様々な工夫がされ、次第にワクチン不足が解消された。かかりつけ患者のみの個別接種医療機関においても患者の家族は対象者とするなど柔軟な対応もあつた。多くの国民が2回目接種を終えはじめた令和3年10月以降はワクチン不足の声も解消された。令和3年12月各個別接種を行う医療機関は、オミクロン株の出現により3回目の追加接種の準備に入っている。初回の予約の混乱を教訓に今後改善されることであろう。



大阪中央病院 3階外来受付



大阪中央病院 健診部受付